

報告事項 ケ

「不登校・引きこもりの青少年の自立を支える地域づくりフォーラム」の実施結果について

「不登校・引きこもりの青少年の自立を支える地域づくりフォーラム」の実施結果について、別紙のとおり報告します。

平成20年1月18日

鳥取県教育委員会教育長 中 永 廣 樹

# 「不登校・引きこもりの青少年の自立を支える地域づくりフォーラム」 の実施結果について

家庭・地域教育課

## 1 趣 旨

不登校や引きこもりの青少年に居場所を提供している13の団体を構成する「鳥取発子どもの居場所ネットワーク」や先進的な取り組みをしている神奈川県でのNPOの実践発表や、不登校経験者へのインタビューダイアログ、総括講演をとおして、青少年の自立を支える家庭・地域のあり方について意見交換をし、認識を深める。

## 2 概 要

(1) 期 日 平成20年1月12日(土) 午後1時10分から5時10分

(2) 会 場 鳥取県立県民文化会館「第2会議室」

(3) 内 容

### ア 実践発表

#### ○鳥取発子どもの居場所ネットワーク 真奏あき氏(鳥取市)

平成18年3月、県内のNPO団体が緩やかに連携してネットワークを結成。文部科学省委託事業「青少年の自立支援事業」を受託して高校生以上の不登校・引きこもりを対象にした事業を実施(詳細別紙資料参照)

#### ○NPOフリースペースたまりば 西野博之氏(神奈川県川崎市)

「川崎市子どもの権利に関する条例」の具現化を図る施設として川崎市が設置し、NPOが指定管理者として不登校の子どもたちを中心としたあらゆる子どもたちが自由に利用し活動できる施設として運営(詳細別紙資料参照)

### イ インタビューダイアログ・意見交換(詳細別紙資料参照)

テーマ:4名の経験者が語る～不登校・引きこもりの青少年を支えるには

家庭は、地域はどうあればいいのか～

インタビュアー 鳥取県教育委員会事務局家庭・地域教育課 山下伸明

登壇者 フリースペースたまりば 西野博之氏

NPO子どもセンターぼちぼち(鳥取市) 鏡宮氏

NPO十人十色(鳥取市) 森井氏

すいーとぼてと(倉吉市) 小谷氏

フリースペース遊鳥(鳥取市) 田中氏

### ウ 総括講演 「青年期の発達課題と不登校という選択」

鳥取大学生涯教育総合センター准教授 小林勝年氏

(詳細別紙資料参照)

(4) 参加者数 125名(中高校生5名、保護者48名、学校教職員24名、

県・市町村職員16名、民生委員・社会教育委員2名、団体・その他30名)

## 3 フォーラムの成果(詳細別紙資料参照)

- ・県内NPOが連携して立ち上げた鳥取発子どもの居場所ネットワークの実践を広く紹介でき好評だった
- ・子どもたちの自己肯定感を高めるためには、自分のやりたいことを思う存分できる居場所や多くの人とともに体験活動ができる居場所が有効であることを認識できた

## 4 フォーラム参加者の主な感想(詳細別紙資料参照)

- ・当事者、保護者、学校関係者、地域など様々な立場の人がひとつの場所に集まって問題を考え合うことができてよかった
- ・苦しみは当事者しか分からないと心を閉ざしていたが、今日「行政・家庭・地域が連携していこう」という取組を聞き、助けていただけるという気持ちでいっぱいになった。より多くの人に理解していただき、認め合える社会になっていくことを希望する

## 別紙資料

### 1 実践発表の概要

#### ○鳥取発子どもの居場所ネットワーク 真奏あき氏（鳥取市）

- ・平成18年3月、県内のNPO団体が緩やかに連携してネットワークを結成
- ・鳥取県教育委員会の委託を受けて本年度高校生以上の不登校・引きこもりを対象にした事業を実施。初めて全県域で事業展開
- ・事業内容は、日常的な居場所として思い思いに過ごせる「つどい」、福祉作業所や食品 工房での活動やねぎの植え付け・収穫などの就労「わくわく体験」、そして自然の中での宿泊体験の3つの内容を実施
- ・問合せや参加者は高校生から40歳代まで幅広く、家族や兄弟からの問合せが多かった
- ・まずは対象者本人や家族から聞き取りを行い、状況の把握を行った。それを元に全体会議で支援の方向について協議。全体会議には専門家を呼んで研修会を開くと同時に、専門家からも支援について意見を伺った
- ・また参加者の中には通院している方もあり、家族はもちろん医師との連携も欠かせなかった
- ・最初は少なかった相互の会話も、一緒に体験した時間と経験でどんどん増えていった
- ・ここでつくったつながりをこれからも続けていくことが重要



#### ○NPO freespace たまりば 西野博之氏（神奈川県川崎市）



- ・「川崎市子どもの権利に関する条例」の具現化を図る施設として川崎市が設置し、NPOが運営
- ・自己肯定感が乏しい現代の子どもたちに、「生きていくだけでみんなから祝福される」場を提供することを目的に運営
- ・「けがと弁当は自分持ち」自分の責任で自由に遊ぶ。刃物も持たせるし、火も使う。木や屋根にも上らせる。一日中泥んこ遊びをする子もある
- ・一日の過ごし方は自分でつくる。「つくって、遊んで、こわす」「作って、収穫して、食べる」「やりたいことを提案し、この指とまれで仲間集め」などが活動の基本
- ・学校に復帰させることが目的ではないが、学校を否定するものでもない。ここで過ごした子どもたちは、ゆったりと自分のやりたいことがとことんやれる生活の中で自分を見つけ、自信を持ち、やがて学校に復帰していく
- ・現在は県教育委員会から、教師の研修を受け入れたりしている
- ・学校に行きたくても学校に行けない子どもたちが、親や教師など周囲の無理解によって苦しめられ追い詰められている
- ・子どものあるがままを受け止め、自己肯定感が高かまり、自信を持てば子どもたちは自立する

### 2 インタビューダイアログの概要

テーマ：4名の経験者が語る～不登校・引きこもりの青少年を支えるには

家庭は、地域はどうあればいいのか～

インタビュアー	鳥取県教育委員会事務局家庭・地域教育課	山下伸明
登壇者	freespace たまりば	西野博之氏
	NPO子どもセンターぼちぼち（鳥取市）	鏡宮氏
	NPO十人十色（鳥取市）	森井氏

すいーとぼてと（倉吉市）  
フリースペース遊鳥（鳥取市）

小谷氏  
田中氏

#### 《主な意見》

- ・世間体を気にして無理に行かせようとする。不登校を家族の誰か一人でも認めてくれると救われる
- ・子どもたちは長い時間考えて自分で不登校という結論を出している。「何で学校に行かない」とか「もう少しがんばって」とか親に言われると絶望する。「じゃあどうしようか」と一緒に考えてほしい
- ・子どもたちは任せればいろいろなことができる力を持っている。それを「そんなことできやしない」と決めつけるのではなく、子どもたちに任せ子どもたちでできないところを支える地域であってほしい
- ・「助けて」といえて、協力してくれる他者と友好的関係を築いていくことが重要
- ・問題を家庭だけで抱えてしまうのは危険。家庭も地域も世間体から抜け出し、ありのままを受け止め、子どもとともに育ち合う関係を作り出すことが重要
- ・不登校という選択を認め、地域の人が自分の持っている力を子どもたちに提供してほしい



### 3 総括講演概要

#### 「青年期の発達課題と不登校という選択」

鳥取大学生涯教育総合センター准教授 小林勝年氏

- ・自立するということは、責任がもてるようになるということ。責任とは、自分というものを自覚し、物事に気づき、それに対してどうしたらいいかが分かること
- ・それは、強制して理解されるのではなく、自由と対等の中で自ら分けることが重要
- ・こうした気づきの場を子どもたちに保障しているかどうかが鍵
- ・学校に「楽しくなくても行っている」「行きたくなくても行っている」子がいることは事実。こうした子どもたちをどうしたらいいかは、本人のみが知ってる
- ・子どもの思いが十分満たされる状態が、子どもを歩ませる
- ・子どもの中で、何が起きているかをみることが鍵
- ・子どものありのままを感じ、子どもを信じ、子どもの行動のプロセスと結果を同等に評価することが、子どもの学習主体を取り戻す
- ・NPOの活動があるから、学校のあるべき意味や学校が取り組むべき方向性も明確になる。子どもも選択肢ができて救われる
- ・「学校に行くことが当然であることを疑い、学校に行かず別の道を選択する」パターンや「学校に行くことが当たり前ということに拒絶反応を起こして、自己を守るために不登校を選択する」パターンがある。いずれにせよ、人はそこで学びそこで成長する
- ・学校に行かないことを許さない社会は、不登校を選択した子の自立を阻害してしまう。ゆとりや選択の余地のある社会の方が子どもの自立には効果的
- ・生涯学習が進めば、不登校という認識もなくなり、子どもの自立を支えられる

### 4 フォーラムの成果

- ・県内NPOが連携して立ち上げた鳥取発子どもの居場所ネットワークの実践を広く紹介でき好評だった
- ・不登校という選択が起きることは特別なことではないのに、家庭を含めた周囲の無理解によって子どもたちも親自身も苦しめられ追い詰められていることを明らかにできた
- ・不登校の子どもたちの自立を支えるには子どもたちのありのまま受け止め、正しく状況を把握し、本人と共に考え、自己肯定感や自信を高めることが重要であることを明らかにできた
- ・子どもたちの自己肯定感を高めるためには、自分のやりたいことを思う存分できる居場所や多くの人とともに体験活動ができる居場所が有効であることを認識できた

- ・不登校や引きこもりの子どもたちを支えるNPOのあり方について、神奈川県先進事例から、鳥取県内のNPOが学ぶことができた

## 5 フォーラム参加者の主な感想

- ・当事者、保護者、学校関係者、地域など様々な立場の人がひとつの場所に集まって問題を考え合うことができてよかった
- ・苦しみは当事者しか分からないと心を閉ざしていたが、今日「行政・家庭・地域が連携していこう」という取組を聞き、助けていただけるという気持ちでいっぱいになった。より多くの人に理解していただき、認め合える社会になっていくことを希望する
- ・NPOの実際の活動を知ることができたし、経験者からのお話も自分の仕事の上でよきアドバイスとなった
- ・実践発表を聞く機会があるのは親にとってひとつのよりどころ。先生や指導員の方などにも知っておいてほしい。ひとつの選択肢として情報を提示してほしい。それだけでも親は落ち着き、子どもへの接し方にもゆとりができる。一人で悩まなくてもいいんだと親が思えないとすんなりと不登校を受け止められない
- ・気持ちを分かり合える人たちとの交流を心から望む。グループに分かれて交流の時間が持てるとうれしい。参加して元気になって帰れる会の企画をお願いしたい
- ・鳥取市は行政が中心となり活発だが、米子市はまだ気軽に相談できる場や居場所が少なく取り残された感じ。鳥取市の方と連携して不登校の家族を支援してほしい。親も積極的に情報を得て前向きに生きていきたい
- ・学校の先生も手一杯でなかなか時間が取れない。是非地域や行政の力を借りたい